生存科学研究ニュース

Vol. 33, No.2　　2018.7 発行

発行　公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518　fax: 03-3567-3608　email: office@seizon.or.jp　http: //seizon.umin.jp

森・その地域社会、生活文化、精神世界における役割の再生的研究会

研究会責任者　藤原 成一

2018 年度に新発足した表記の研究会の第 1 回目を、5 月 18 日(金)、生存科学研究所で開いた。はじめに研究会の意図・内容・目的について責任者の藤原から説明を行った。日本において古代から近世まで一貫して森が地域社会や生活慣行や精神文化にいかに深く関わってきたか、その森が近代から現代にかけて欧化主義と富国強兵策、軍事体制、高度経済成長政策などによっていかに破壊されてきたか、物心両面からそれを歴史的に解明すること、森との共感共生を喪失した現代の文明と精神状況の中に改めて森の意義を考察すること、そして森のもつ諸機能を現代の精神の荒蕪地に再生する方途を構築すること、などを文明史的、生態学的、政治経済的など諸観点から追究し、大都市の無機質な生存環境の中に森と共生する可能性を提起することを目的として、共に研鑽していきたいと誘いかけた。

続いて「コミュニティセンターとしての森」の表題で藤原が発表を行った。まず森を考察する前提として、人間の感性や心性を重視しようとする自らの歴史観を述べ、歴史を貫く伝統的自然認識、民俗的宗教的自然観を再確認した上で、日本人の自然とのつき合い方を通時的共時的に分析し、そこから自然の見方や人間にとっての景観の意味などを生の原体験から再構築して景観の新しい表象方法を仮説的に提起した。五感による自然把握と聖俗両面をもつ時空間認識、それらの相互媒介と融合による景観が生を活性化するという仮説で、以上の諸前提の上でこそ森との共生や森の再生の思想と方法は可能とする。

森考察の諸前提の確認に立って、山ー里山ー野ー里ー水、という構造的時空間認識が聖ー俗、高ー低、遠ー近などの生存環境観を育み、それら各々の時空間において森や樹木がいかに生存に機能したかを具体例で語った。とくに聖空間としての森、鎮守の森や琉球の御嶽などの聖俗融和空間がいかに地域社会内に機能してきたかを、南方熊楠の森を守る闘争思想も例示しながら、現代の課題として見つめた。森は俗事をはかるコミュニティセンターではなく、民俗や伝統を共有する地域のこころの支援の場、地霊や祖霊や神仏に共感する精神共同体の俗事を超えたコミュニティセンターであった。森は住民を慰安し文化を涵養する地域の力そのものの表象であった。真にコミュニティセンターたりうるのは超俗の時空間であり、森のもつその機能をこれからの生存環境の刷新の一方法として参照したいと結んだ。都市に親水空間をつくったように親森空間を創成するのである。

（石垣島の名蔵御嶽と於茂登岳）

発表のあと、参加メンバーが各々とり組みたい課題を語りつつ自己紹介を行った。テーマとしては、生の時空間における森の意味や機能の史的、生態学的、民俗的考察をベースに、コモンズとしての森の見直しと再掘と応用、ケア力や治癒力など森のもつ心身両面の力の再生の方法、ヤンバルの森の生態的文化的見直し、防風力や防潮力による未来の森づくり構想、社寺の森による地域の活性化、社会と自然との関係レジリエンスの思想と方法、大都市空間における市民の森、新コミュニティセンターづくりなど、多分野からの参加者らしい多視角からのテーマが提案された。そして第 2 回研究会を 9 月、京都での森歩きと研究発表を約して閉会した。

第 66 回公益社団法人日本医療社会福祉協会全国大会において研究成果を発表

研究会責任者　吉田 浩子

2018 年 6 月 15 日(金) - 17 日(日)に表記全国大会が香川県サンポート高松で大会テーマ「地域まんでがんソーシャルワークー生活することを支えるためにー」として開催され、初日のシンポジウムで当該自主研究「対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造研究会」の成果の一端を報告した。

今回のシンポジウムは、2017 年度に本自主研究会が行った医師、看護師、医療ソーシャルワーカーを対象とした「職務上の倫理的葛藤」経験等に関する社会調査のうち、医療ソーシャルワーカーを対象とした調査が四国全県の医療ソーシャルワーカー協会の協力のもとに実施されたことに端を発して企画された。当該全国大会の主催者から研究成果の共有を目的にシンポジウムを開催したいとの依頼があり、研究会の総意として参加を受諾した。シンポジウムのテーマは、本研究会の研究テーマでもある「対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造：チーム医療の推進に向けて」であった。

当日は、本研究会からシンポジウムのコーディネーターとして北川が、シンポジストとして吉田と福永が参加した。さらに、調査対象とした各専門職者の立場からの発言が求められたことから、生存科学研究所理事の竹下啓東海大学教授が参加した。吉田が今回の調査結果の概要を報告した後に、看護師として福永、医師として竹下、医療ソーシャルワーカーとして和田有加香川県医療ソーシャルワーカー協会会長が、それぞれの専門職の立場からの本調査結果の解釈と、医療現場において求められる職業倫理および多職種連携に向けた課題について説明した。

会場には 100 人を超える参加者があり、質疑応答も活発に行われた。医療専門職者の協働を考える際に研究者の視点が入ることの意義が再確認されたのみならず、現場を熟知した参加者からの発言はいずれも示唆に富むものであり、本研究テーマのさらなる探究に資する貴重な機会であった。

このような研究は、各専門職者の協力なくしては成立しないことは自明であり、調査協力のみならず、このような研究成果を共有する機会を提供して頂いた和田有加香川県医療ソーシャルワーカー協会会長、山本隆司愛媛県同協会会長、郡章人徳島県同協会会長、中本雅彦高知県同協会会長、および調査に協力して下さった方々、当日ご参加の皆様に、心からの謝意を表したい。

健康価値創造研究会報告（第 9 回・10 回）

研究会責任者　森本 兼曩

表記の研究会が、2016 年 12 月 12 日(月)に「栄養食行動学と健康支援の諸相」および 2017 年 2 月 24 日(金)に「ストレス情動反応・気分と遺伝子発現」をテーマとして、順天堂大学医学部会議室にてそれぞれ 2 人の講演と議論が行われた。

佐々木敏（東京大学大学院医学系研究科 社会予防疫学教授）は、自記式食事歴法質問票（DHQ/BDHQ）の開発とその市民への利活用展開で、厚労省の支援も得てこの分野を主導されているが、ここでは、「栄養学再考：健康価値創造のあり方を求めて」と題して、「人の栄養・食を対象とした『栄養学』は、今日本において如何ばかりであろうか、研究・教育面を中心に、他国と比較して考察し、あるべき姿を提示したい」と講演を開始した。

学術文献検索サービス PubMed を用いて、主に、食品・栄養素等の摂取や食消費行動と健康との関連を扱った研究論文数を検索したところ、過去 10 年の論文数は、オランダ、フィンランド、米国は、各々日本の 7.1、5.9、4.6 倍であり（人口調整済み）、*Public Health Nutrition* の総掲載論文 3,736 編中日本からの掲載は 32 編（0.86%）である。このように、日本において健康価値創造に直結する人を対象とする栄養学研究の決定的な遅れが読み取れる。

そこで、この分野の研究論文が多い国とわが国における「栄養学の位置づけ」を比較し、次の 2 点が明らかとなった。⑴ 外国は、医学系・公衆衛生系の大学・大学院内に教育研究の場を置いている国が多いが、日本は生活

科学や家政学に位置づけされている、⑵ 欧米諸国は、栄養疫学・予防医学を研究教育の軸としている国、大学、研究機関が多いが、日本は動物実験や家政学的な研究に重きを置いている。

このように見てくると、わが国の現状は、健康価値創造に資する栄養食行動学の存在が危うい、と言える。包括議論は早急に、医学公衆衛生学にこの分野の研究教育講座を創設して、将来を担う若者に対する教育と研究実践を進める必要がある、「国は食の上に建つ」とは至言である、との結論であった。

我々は、読み書きができる、というリテラシー教育を享受する権利を持っているが、同様に、憲法で保障する健康で文化的な生活を営む基本的権利も持っている。

福田洋（順天堂大学医学部総合診療科准教授）は、「健康経営とヘルスリラシー・健康支援のめざすもの」との演題で、ヘルスリテラシーは、これに向けて種々の健康学習を通じて健康の維持増進＝ヘルスプロモーションを進めていく行動動態であり、健康格差を乗り越えていく処方箋でもある、と話を進める。最近では、健康予防医学に関連する国際会議でも、これらヘルスリテラシーに関する議論が多く展開され、話題を呼んでいる。

日本でも健康格差が増大しており、様々な施策が行われているが、特定健診・保健指導の導入により、健診のデータの包括分析に基づいたデータヘルスプロジェクトが進められている。生活習慣病関連の高率の未治療群の存在(糖尿病 5 割、高血圧 7 割、脂質異常症 9 割など)も明らかになっている。ヘルスリテラシーは、健康的な職場や地域社会を作る「資源」としても捉えることができ、ヘルスプロモーション・エンパワーメント活動の有用なアウトカム評価としても重要である。

近年、多くの企業が取り入れている健康経営は労働者の健康の維持増進を目指し、生活と労働の満足度を向上させて、同時に、労働のパフォーマンスも上げて行く企業戦略である。このゴールは、組織のヘルスリテラシー向上であり、現在進行している先進企業でのヘルスリテラシー良好実践(GP)が、今後中小企業にも、さらに家庭や学校へと広がっていくことが期待される。

六反一仁（徳島大学大学院医歯薬学研究部病態生理学分野教授）は、目前の医療崩壊の危機を前に急がれる、病院から在宅への転換と並行し、高齢者の QOL を改善して健康寿命を支える新たな長寿医療の展開が求められている、として「ストレスと脳腸相関：乳酸菌が開く新たな予防医療」との演題で講演した。

現在、一般外来を多数訪れる高齢者の QOL を妨げる要因は、排便障害、睡眠障害、食欲低下、関節痛などで、これらを克服して、高齢者の健康寿命を延伸させる新たな医療介護が求められている。

ヒトの腸内には約 10 兆個の微生物が常在し、これらの微生物による脳腸相関軸の活性調節機構が注目されている。Lactobaci llus gasseri CP2305 は、経口摂取した乳酸菌は腸に定着しないとう従来の概念を打ち破り、腸に定着する乳酸菌として分離された。

六反研究グループは、CP2305 を用いた一連の臨床試験を行い、その成果を紹介した。3 か月の服用試験では、ストレスによる心理的・身体的症状を緩和し、ストレスによる睡眠障害を改善することを示した(Sawada et al. *J Funct Foods*. 2017; Nishida et al. *J Funct Foods*. 2017; Nishida et al. *J Appl Microbiol.* 2017)。また、過敏性大腸炎症候群(IBS)患者への CP2305 の服用試験では、約半数の患者でIBS の臨床症状を大きく改善させ、この際、ストレスによる EIF2 シグナル関連遺伝子の発現低下を是正して症状を改善することを示した(Nobutani et al. *J Appl Microbiol*. 2017)。

また、Lactobacillus casei Shirota は、ストレスによる睡眠障害の改善作用が強いことも示した(Takada et al. *Beneficial Microbes* 2017)。

これらの臨床研究の成果を含めて、今注目されているプロバイオテイクスの効果につき例示紹介してその脳腸相聞を介した予防健康増進作用を包括的に議論した。これまで知られていなかった多様な朝政菌作用を利活用展開して、食の分野で、新たな予防医療を展開していける可能性を感じた議論であった。

健康予防医学実践研究で、常に苦慮するのが、個々人の気分の評価である。横山和仁（順天堂大学大学院・医学部衛生学講座教授）は、海外でもひろく使用されている POMS（Profile of Mood States）の日本語版を作成して 1994 年以来国内での利用に供した。この POMS は緊張・　抑うつ・怒り・活気・疲労・混乱の 6 区分について過去 1 週間のそれぞれの強度を評価するとともに得点を包括計算した「TMD 得点」（総合的気分状

態得点）も利用できる。

自分自身の気分に対する気づき、メンタルヘルスケアや組織全体のうつ傾向の把握、スポーツ選手の疲労度やコンディションづくり指標、精神障害の治療経過評価やリラクゼーション効果の判定・疲労感の測定などあらゆる分野で利用されている。

最近、仲間とのつながり感などを評価する「友好」尺度が追加され POMS2 改訂版が出版されたが、尺度の標準化がより広く可能になるなど、その健康尺度としての利用価値はさらに向上している。音声による気分診断である、こころコンパス（Empath®）などとともに健康の評価測定時における､気分評価診断法では注目に値する。

第 6 回生存科学研究所市民公開講座

2018 年 7 月 1 日(日)、市民公開講座「ユマニチュードがもたらすものー環境と情報と変容ー」が、上智大学において開催された。これまでの包括的ケア技法のユマニチュードの今後の展望、専門家による講演を行い、ケアに関心のある専門職員、市民など含め 423 名の参加があった。

基調講演：イヴ・ジネスト (京都大学こころの未来研究センター特任教授). ユマニチュード その哲学・生理学・環境学的因子と考察

シンポジウム：ケアの科学的分析・評価と実践

⑴ 本田 学 (国立精神・神経研究センター神経研究所疾病研究第七部部長). 情報環境から脳と心の病に迫る「情報医療」の可能性

⑵ 栃本一三朗 (上智大学総合人間科学部教授). 介護に望むこととお礼したいこと

⑶ 森山由香 (社会福祉法人三篠会インストラクター). フランスのユマニチュード認証制度と日本への導入課題

速報！：生存科学シンポジウム開催日決定

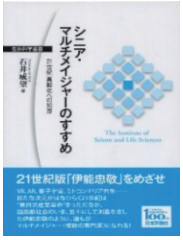
日　時：2018 年 12 月 15 日（土）13 時 - 17 時

テーマ：生存の中の依存

詳細は 8 月中旬ころホームページに掲載します。

「生存科学叢書」刊行開始！

生存科学研究所では、学術誌「生存科学」において、多年にわたって蓄積されてきた研究成果や最先端テーマへの積極的挑戦、実践活動を、より広く社会に公開し、本研究所の理念と総合学としての生存科学の意義を諸学界や一般社会に広めていくことを、かねてから計画していました。それが 2018 年 4 月、日本評論社より「生存科学叢書」として刊行の運びとなりました。1 回目は石井威望『シニア・マルチメイジャーのすすめ』、2 回目はイヴ・ジネマト、ロゼット・マレスコッティ、本田美和子編著『ユマニチュードを語る』の 2 冊で、ともに現代を先駆する話題性豊かな力作です。



本研究所会員の方で購読ご希望の方は研究所宛にお申し込み下さい。8%税なしの定価で、送料は研究所負担でお届けいたします。なお「生存科学叢書」はこの 2 冊に続き、年に 2～3 冊のペースで刊行の予定です。ご期待ください。

医療にみる伝統と近代ー生きている伝統医学

生存科学研究所常務理事 津谷喜一郎と東京大学･長澤道行の共著の本で、『医療にみる伝統と近代ー生きている伝統医学』が明石書店から発行されました。

医療をどう捉えるか、そして生存とは何を意味するのか? その鍵を握るのは、伝統医療や代替医療も含めた幅広い視点からの考察です。生存科学研究所での自主研究(2002-2011 の 3 期)がベースとなった経済的・倫理的・構造的側面からの理論的な分析がなされています。

研　究　会　等　日　報

7 月　1 日(日)	第 6 回市民公開講座（ユマニチュード）
7 月 13 日(月)	第 4 回みらいエンパワメントカフェ
7 月 17 日(火)	第 1 回健康の社会的決定要因としてのソーシャル・キャピタル研究会
7 月 28 日(土)	第 1 回生存の理法の新たな展開に関する研究会
8 月 24 日(金)	第 5 回みらいエンパワメントカフェ
9 月 28 日(金)	第 6 回みらいエンパワメントカフェ